

### 第3章 現状と課題

#### 小城市の協働のパートナーの例

##### 市民

###### ～現状～

近所の人が家族を除く第一の支援者であることを理解していない。  
近所づきあいが希薄になっているが、やはり近所での助け合いは必要と感じている。

###### ～課題～

自らもサービス提供者になれるという意識を持つ。  
行政まかせのサービスが続かないことに対して危機感を持つ。

##### 地縁組織

#### 区(一般的に町内会、自治会など)

###### ～現状～

地域住民同士で顔を知らない人が多く、コミュニケーションがとりづらくなっている。  
地域での連帯感やお互いさまと思いやりの意識が低下してきている。

###### ～課題～

地域のことを一緒に考える機会を設ける。  
地域の情報を共有する。  
世代間や異種・異質の組織などとのコミュニケーションを図る。

##### 婦人会

###### ～現状～

それぞれ行政区単位で組織されていた婦人会が世代交代や役員の引き受け手がなく、消滅しており会員数が減少している。

###### ～課題～

新たな活動分野の開拓や趣向を凝らした行事を行う。  
会員の確保(広く各年齢層に呼びかける。)  
各年齢層が持つ考えを取り入れ、仲間に入りやすい雰囲気づくりを行う。

## 老人クラブ

### ～ 現状 ～

高齡化による会員減少により組織が弱体化している。  
新たな取組による活動が見出せない。  
地区単位の老人クラブの活動はいいが、市単位、県単位での動員要請が苦痛になっている。

### ～ 課題 ～

団体の存在意義を確認し、参加しやすい魅力ある活動を実施する。  
(自らも引き込む努力をする。)  
若手リーダーの養成と若手会員の組織化を促す。  
地区単位より大きくネットワーク化することによって力が発揮される。

## 消防団

### ～ 現状 ～

地域への密着性、要員動員力即時対応力という特性を十分に発揮するため、初期消火や災害時には非常に重要な役割を担っている。  
女性消防団ができてきている。

### ～ 課題 ～

団員数の減少や新規団員加入者の減少に伴う団員の高齡化と退団者が増加している。  
= 地域の防災力が低下している。  
消防団員は、水防団員でもある。  
若い人も地域の一員として、自らの地域の安全・安心に努める。

## 自主防災組織

### ～ 現状 ～

個々人が「地域の安心・安全を守る」という意識を高揚させながらコミュニケーションをとって互いに理解している。  
災害時等には必要に応じた対応が迅速にできるよう組織化されてきている。

### ～ 課題 ～

組織構成員の高齡化と若者への周知及び理解不足により加入が少ない。  
実動経験が少ない。



## 志縁組織(個人の志・使命を社会的な力として集った組織)

NPO(法人の有無を問わず)(ボランティアグループ、市民活動団体など)

### ～ 現状 ～

明確な目的達成のため設立され、組織体制も確立している。  
サービス提供の主体となり、得意分野を活かした充実した仕組みによる柔軟なサービス提供ができています。

### ～ 課題 ～

資金確保が必要。  
(補助金や助成金の確保など工夫が必要)  
今後、より一層の協働を進めるための環境整備が必要である。

## 経済団体

事業所・商店街(JA、漁協、商工会議所、商工会、ロータリークラブなど)

### ～ 現状 ～

CSR(企業の社会的責任)が叫ばれ、社会貢献事業に取り組んでいる。  
営利を目的としており、採算性が重要視されている。  
商店街でまちづくりを考え、**取組**んできている。

### ～ 課題 ～

企業市民として共に公共を担う「市民としての役割と責任」を持つ。  
企業の持つ資源を活用し、市民活動を理解し、支援を行う。  
市民も地域の事業所や商店街を応援する。

## 学 校 育友会、育成会(PTA)、佐賀大学など

### ～ 現状 ～

各団体等の利点を出しあい地域社会の中で学校生活を見守る体制づくりができています。  
佐賀大学憲章に「社会貢献：教育と研究の両面から、地域や社会の諸問題の解決に取り組めます。」と宣言され、小城市と相互協力協定を結んでいる。

### ～ 課題 ～

すべての市民が子ども達を地域の宝として見守るよう努める。  
市民は、地域の子どもの育てる学校を理解し、支援する。  
産学官連携による地域・社会貢献を果たす。



このような現状と課題を受け、……

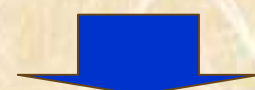
市は、以下のような現状認識を切り換える。

市自らが行った方が、良いサービスが提供できると考えている。

市民と話し合う場をもとうとしていない。(市民や現場の意見を大切にしていない。)

市民に役に立つ人 = 市職員という認識が薄い。  
縦割り意識が強く、横断的に協力し、意思形成することができていない。

市民に対して、必要な情報をきちんと出していると思っている。



協働が地域の諸課題を解決する手段ということを理解し……

情報を分かりやすく公開する。(透明性)

行政各課の繋がりを密にする。(連携・協力意識を高める。)

市民の意見をよく聞く。

市民を信頼し、任せる。

市民起点の考えをもち、常に市民との協働を意識する。

というように認識を深めていく時です。